

ベトナム教育史概況

DINH Khac Thuan

(二ノ宮 聡 訳)

Outline of History of Education in Vietnam

The history of education in Vietnam can be divided into three main phases. The first phase was the period of traditional education (also known as “Confucian education”), referring to the period up to 1919 when the last civil service examination was conducted in the country. The second phase was a new period when Vietnam worked on socialist reforms to build a socialist country. The third phase refers to the present day. This paper examines the history of education in Vietnam with a focus on the Confucian civil service examination system and other major aspects of education.

キーワード：科挙、儒教、国子監、学校、四書五経

はじめにベトナム教育の発展の過程を概述し、次に、ベトナムの伝統教育過程における学校システムと育成方法について紹介したい。

1 ベトナムの教育発展の過程

1. ベトナムの教育

ベトナム教育の設立は中国漢代の歴代帝王による占領と統治によって、郡や県が北方の中国に属するようになった時期に出現した。この期間に、中国の中央政権が派遣した地方行政長官は既に学校を設立し、漢文化を伝えた。この中で代表的なものは、交趾太守、士燮¹⁾ が二世紀に蓮楼城に学校を創立したことである。このため後世の人々にベトナム教育の創始に功績があったと見なされ、安南学祖と尊称され、蓮楼首府（現、ベトナム北寧省順誠県）で寺廟祭祀までおこなわれている。その目的は支配者に奉仕する者と現地の官吏の子弟を養成することに限られており、李琴や姜公輔など、経史に通じた優等生

1) 士燮 後漢の官人、187年より交趾太守。

や科挙に及第する者も現れた。ただ、交趾人は必ず皆な北国〔中国〕へ行き科挙試験を受けなければならなかった。しかるに、漢字はすでに広く使用されベトナム人の正式な文字となっていた。これがベトナムの古代教育の初期である。

十世紀以降、ベトナムは独立の時代に入った。ベトナムの歴代王朝は呉朝（937-967）から、丁朝（968-980）、さらに前黎朝（980-1009）、そして李朝（1010-1125）に至るまで統一して漢字を使用した。それによって教育の発展のために中国の様式を模倣した。つまり、ベトナムの古代教育は儒教經典の教育であり、ベトナムの古代歴史、李陳時代（11～14世紀）から黎阮時代（15世紀～20世紀初頭）までの数百年間、一貫していたといえる。

1920年から、ベトナムは教育改革をフランスの様式に倣って進めた。フランス語が次第に漢語に取って代わるという状況と西洋の教育体制の影響は1945年の越盟八月〔ベトナム独立同盟〕革命の成功によって終わった。

ベトナム南部の解放により全国が統一され（1975年）、ベトナムの教育体制も統一され、ロシアと東欧地域各国の教育方法に向かって協調と発展が続いた。1986年の改革開放以後、とりわけ社会主義制度システムの崩壊（1991年）以降、ベトナムの教育は外国の具体的様式に倣うに止まらず、多様な基礎に基づいて国家に適した方法を選択しているが、西洋の国家、とりわけアメリカとイギリスに傾斜する面もある。

ここ数年、および近い将来にあつて、ベトナムの教育はすでに多様化して世界に近づき、また本地区の発展は国家の趨勢として、私立学校が日増しに多くなり、国外と提携した教育様式はさらに拡大して、新型の大学を建て国際標準に達するために努力奮闘しているところである。

総じて、ベトナムの教育の歴史はおおよそ三つの段階に分けることができる。第一段階は伝統教育（儒学教育とも称する）の時期で、1919年に最後の儒学試験〔科挙試験〕が実施される以前の期間。第二段階は我が国が社会主義改革に取り組み、社会主義建設を行なった新时期。第三段階は現代である。本稿はベトナムの教育の歴史のいくつかの側面と儒学の科挙試験のみに焦点をあてたものにすぎない。

2. ベトナム伝統教育の発展過程

ベトナムの儒家伝統教育は李朝に始まり、黎朝初期の改革（15世紀）を経て、後代の王朝（莫朝、後黎朝、鄭朝と阮朝、15世紀～20世紀初頭）の模範となった。

儒家教育の開始 李—陳王朝

李朝の李太祖（1010-1028）は教育を重要視しており、主に仏教寺廟での学習を重視していた。歴史に名を残す満覚禪師など多くの人が寺廟での訓練を経て成功しているが、当時の朝廷は未だ科挙試験を行なっておらず、進挙制度によって人材を選抜していた。

李朝の李聖宗（1054-1072）は教育を民衆へと広め、儒学は強い関心を得るようになった。1070年、李聖宗皇帝は学校の創設、文廟の設立、さらに儒家の学祖である孔子を祭祀するよう命を下した。李朝の仁宗皇帝（1072-1128）になると教育はさらに重視され、朝廷は科制選士〔科挙による人材選抜制度〕を設け、1075年に最初の科挙試験を実施した。これは三場考試とも称され、目的は博學で經史に通曉して

いる人材を選抜することであったため、「明経」科と名づけられた。その後、1086年、1093年、1110年、1130年・1138年の4回の科挙試験が実施された。

1076年、李朝の仁宗皇帝は京城に国子監を建て、皇族と官吏の子弟を教育するよう勅命を下した。1165年、李朝の英宗皇帝は太学生科を設置し、1195年になると三教科を設立した。その目的はいずれも儒・道・仏の三教の經典に通暁している人材を選抜することにあった。

このように、李朝はベトナム教育と科挙試験の基礎となる王朝であった。

陳朝建国以後、教育と科挙の範囲・影響は日増しに大きくなり、正規化していった。1253年、陳朝の太宗皇帝は京城に国学院を建て、貴族の子弟と士子を入校させ四書五経を受講させた。陳朝はまた、太学生科と新たな規定を作り、試験を四場に分け、具体的な科目をつけ加えた。

陳朝に各路に督学官と各州・府に教授官を初めて創設し、それらを学官と総称して地方教学の責任を負わせた。その中の天長府（現、ベトナム南定省市）は陳族の郷里と府第であるため、比較的多くの評文試験が行なわれた。

陳時代の科挙はすでに隆盛の局面が現われ、それが定式化していたが、中国の唐代・宋代の科挙の影響を受けていた。

黎代の教育改革 (1428-1527)

黎王朝の建国以後、太祖皇帝 (1428-1433) は重ねて学制を組織し、学風を振興し、科挙試験を正規化し、京都の国子監の規模を拡大して、全国にあるそれぞれの州・路・府の学堂を復興させた。黎代の聖宗皇帝の在位期間には陳朝期の郷試、会試が再び実施された。その改革は莫朝 (1527-1593)、黎・鄭朝 (1600-1788)、阮朝 (1820-1945) など以後の王朝の標準となったが、各王朝の科挙試験にはそれぞれ独自の特色があった。

黎朝から阮朝 (15世紀～20世紀) には、制度において中国の明清時代の科挙を倣っている点がある。

李朝、陳朝、胡朝の時代、儒学が育成の対象としたのは主に貴族・官員および地主階級の子孫である。学校は国子監と官府が建てた数箇所の学校だけであった。そのため、試験は未だに定型をもたず、科挙も依然として普及していなかった。李朝において、国子監は太子と京城の官員の子孫が学習に来るのみであった。1253年、陳王は国学院を設立し、さらに全国の儒者に四書五経の聴講に来させた。このほか陳王は天長府に学校を建てたが、これは皇帝と官員の子孫のためのものでしかなかった。

黎朝になり、建国が始まると、黎王はすぐさま多くの政策をうち出して実行し、広く深い改革を行ない、教育と科挙制度を発展させた。具体的には次のとおりである。

a) 学校の建設、多くの招聘、庶民の就学

戦争の終結後、黎利皇帝は全国に学校を建て人材を育成するよう勅命を下した。そのために京城には国子監、それ以外の各省には学校ができた。皇帝がみずから官員と庶民の子弟の中から最も傑出した人材を選びこれらの学校へ送った。

1434年、黎の太宗皇帝 (1434-1442) は数百の機関の子弟が国子監に志願することを許可し、同時に1000名を選出して三つの等級に分けた。第一等級と第二等級は国子監で学び、第三等級は省の学校で学

習した。しかも省の学校で学ぶ学生は25歳までに一等級か二等級に昇級できなければ、故郷に帰らなければならず、学習を続けることはできなかった。

黎聖宗（1460-1497）の時代になると、育成の対象は社会全体に及んだ。1462年、黎聖宗は命を下し、社会のあらゆる人々が試験に参加することを認めた。1484年6月、さらに儒生を選抜し国子監の三舎にあてた。会試の参加者は、三度合格すると上舎生となり、二度合格なら中舎生と呼ばれ、一度合格なら下舎生と呼ばれた。それぞれの舎では100人の舎生を受け入れ、一定の金銭〔奨学金〕受け取っていた。舎生はそれぞれ九份の金銭を受け取ることができ、任職時には、上舎生は三份、中舎生は二份、下舎生は一份を与えられた。

b) 試験制度の厳格化

教育が国家の人材教育に対してもたらす重要な作用を認識していたため、黎朝の皇帝はみな試験のシステムを特に重視していた。内容から形式、試験時間や場所、学生数、さらには学生の道德の検査に至るまですべてが厳格になされていた。

黎太宗、紹平元年（1434年）の黎朝定取士科目の詔に以下のようにある。

黎太宗紹平元年、黎朝定取士科目詔曰：

得人之效取士為先，取士之方，科目為首，我國家自經兵燹，英才秋葉，俊士晨星。太宗立國之初，前興學校。祠孔子以太牢，其崇重至矣。而草昧雲始，科目未置。朕纂承先志，思得賢才之士，以副側席之求，今定為試場科目，期以紹平五年各道鄉試，六年會試都省堂。自此以後，三年一大比，率以為常，中選者并賜進士出身。所有試場科目，具列于后，第一場經義一道，四書各一道，并限三百字以上，第二場制，詔，表；第三場詩，賦；第四場策一道，一千字以上。（『大越史記全書』卷11,14a 黎紀二太宗）

（人を得るの効は士を取るを先と為し、士を取るの方は科目を首と為す。我が国家は兵燹を経てより、英才は秋葉のごとく、俊士は晨星のごとし。太宗立国の初め、前に学校を興す。孔子を祠るに太牢を以てし、其の崇重すること至れり。而して草昧雲始にして、科目未だ置かれず。朕、先志を纂承し、賢才の士を得んことを思いて、以て側席の求めに副う。今、定めて試場科目^{つぐ}を為り、期するに紹平五年（1438年）を以て各道郷試し、六年、都省堂に会試す。此より以後、三年に一大比し、率（おおむ）ね以て常と為し、選に中（あた）る者には並びに進士出身を賜う。所有（あらゆる）る試場科目は後に具（つづ）さに列す。第一場は經義一道、四書各おの一道、並びに三百字以上に限る。第二場は制、詔、表。第三場は詩、賦。第四場は策一道、一千字以上。）

続いて1463年、黎聖宗は会試を三年に一度行なうと規定した。このほか、彼はさらに試験を受ける人の指標や道德、試験の時間などを明確にした。

これら科挙試験の規定は明朝の科挙の方式を模倣したもので、異なる点は明朝の科挙が三場なのに対して、黎朝の科挙は四場であって、詩賦の一場が増えている。黎朝が定めた郷試の方法は、四場の試験の前にまず暗写の一場を行なうものであった。

c) 考生と及第者の待遇制度

学生と考生は軍役に就くのを免除されていた。県、鎮レベルの試験合格者は労役が免除され、直接国子監に入学した。だが、彼らは上述の優遇措置は失われた。1483年、黎朝聖宗皇帝は次のように指示している——郷試の合格者は、もし、いかなる考試にも合格しなければ軍隊に入隊しなければならない。一度試験に合格しただけなら通例に照らし平民に戻す、と（『全書』第二集、486頁）。

また、進士に合格した者に対しては、東花門に金榜を掲げて名を示し、金銭や衣、冒などを賜った。

1484年、黎聖宗皇帝は碑文に進士合格者の姓名を刻むことを許した。これは進士碑文と呼ばれる。同時に進士の地位を次のように分類した。

第一甲の合格者の場合、第一名は正六品を称し、第二名は従六品を称し、第三名は正七品を称する。第二甲の合格者は従七品を称し、第三甲の合格者は正八品を称する。もし翰林院に進むなら一級を上げる。

状元、榜眼、探花は「進士及第」とし、正榜は「進士出身」、副榜は「同進士出身」とする。

郷試、会試、廷試のほか、黎王朝は多くの他の試験を行なうことで教師、行政職員などを選抜した。たとえば1466年、各府で訓導の試験を行なっている。王朝は、「どこかの訓導で欠員が出ているならば、各堂の監生および各衙門の吏員から選び、第一期、第二期、第三期の会試に合格し、しかも品德を備えていさえすればよい」と頒布した。

黎朝はさらに作文、写字、数学による選抜を重視していた。1437年、筆記と数学の試験では690人が合格し、それぞれ中外衙門の吏員となった。具体的には、第一期は古文の筆写、第二期は真字〔漢字〕、草書の筆写、第三期は数学の試験である。監生と従軍者以外の人々と生徒はみな試験に参加できた。

以上の改革によって、黎朝の儒学教育は、突出した人材、知識と才能、品質をそなえた官員たちを育成し選抜することができた。

黎朝の儒学教育について、阮朝の歴史家は次のように評価している。「封建王朝時代の科挙制度の中で最盛期は洪徳時代である。広く招聘を行ない、公平に選抜したことは、後代の遠く及ばないところである。この朝代の人々は自由に、そして幅広く自身の才能を発揮することができ、真に能力ある者はみな朝廷の要職に就くことができた。全国で有能な者は一人も見過ごされることはなかった。そのため黎朝の政治は日増しに隆盛になっていった」。

2 学校のシステム

1. 京城の国学院

儒教は実質的に一つの政治学説である。それは政策を体制化することによって封建社会の権力を強固なものにすることができた。孔子は儒教を創設した儒教の聖人であるため、文廟、国子監は京都に建設された。

文廟（現、河内棟多群）は李太宗朝時代、昇龍京城（1028-1054）に設立された。1070年、李聖宗朝の

時代になると、文廟は修復されるとともに、孔子の石像および国子監も建設された。国子監は李朝時代に設立され、陳朝になると名を国学院と定め、貴族や官吏の子弟の入学を奨励したほか、平民の士子でも聡明好学であれば出身や貧富を問わず入学することができた。このように、政府は人材選抜の基礎を大きく広げただけでなく、社会の中下層に属する知識人に科挙試験を通じて社会の上層へと移る機会を与えた。国学院は三年を学習期限として、学士は三年勉強した後、まだ試験に合格せず、監生になっていなければ、そのまま留まって追試験をおこなった。その過程では院内の厳格な規定を守らなければならなかった。

京城には国子監以外に昭文館、崇文館、秀林局、中枢館など、他の公立学校があった。

黎朝の初期になると文廟と国子監が分離された（現在、我々が目にする文廟と国子監と同じ）。

この時期は、文廟と国子監は祖宗を祭る場であり、学校でもあった。

毎年、朝廷は文廟で祭礼儀式を行なった。1467年、黎の聖宗皇帝は博士の地位は国子監の監生に五経を教えると定め、同時に朝廷に五経を印刷して国子監の学生に与えた。五経のほか、四書、登科陸録、会試録、玉堂文範、文選、綱目、その他の葉書もあった。

国子監は陳黎朝の京城の公立学校であり、全国で最も大きな規模の学堂であった。

2. 府、路の学校

昇龍の国子監以外に、各府、路にもそれぞれ公立学校が建てられ、国子監における経書の講義、文章制作の教授、詩文の評論などの教学方法が模倣された。その方法は次のとおりである。

経書の講義：学官は規定により毎月定期的に経書を講じる。この課程に従い、四処の学士も聴講できる。

文章制作の教授：毎月定期的に教師が題材を出し学生に作文させる。教師の要求に従い、学生はその場で提出するか、その日のうちに提出する。家での宿題であれば期限内に提出する。

文章評論の取り組み：学生はあらかじめ答案を提出し、教師が校閲した後、評点の期日を決める。立派な文章は公開で読み上げる。時には学生を激励するため教師は賞与を与え、宣読が上手な学生には出来の良い文章を朗読させる。

公立学校の系統以外に、地方の郷村も学校を組織し、教師を招いて講義を開いてもらった。郷村ではみずから学費を用立てた。裕福な家では教師を招き子どもに教えてもらうことさえあった。教師の大部分は官吏退職者や、まだ職に就いていない儒士である。これらの学校は郷村に散在していたので郷学と呼ばれた。郷村の人々はみずからの子弟が勉学につとめるよう励まし、科挙及第者と功名ある人をたいへん敬服した。

公立学校と私立学校は大同小異であり、私立学校の教師の報酬は学生の寄付〔授業料〕から支払われ、公立学校の教師は朝廷の恩恵と俸禄を受けた。一部の郷村ではさらに学田を設け、郷田の収穫によって教師の功勞に報いたが、学習内容と教学方法の違いはさほどなかった。試験の期日になると、公立学校

の学生と私立学校の学生の区別はなく、全ての試験場で同一の試験問題を使用した。

3. 育成方法

儒学の教育体制では課程の内容を定め、それを儒家思想と符合させるよう調節した。

書籍資料、特に『大越史記全書』には丁亥光順八年（1467）に初めて五経博士の官を設置し、それぞれが専門に一つの経書を研究し学生に教授したとの記載がある。朝廷はさらに『五経』を頒布して教材とした。黎代以降、儒家の経典は重要なカリキュラムに組み入れられていた。

『四書』と『五経』は経伝と総称され、史、記、詩文など他の教材は外伝と称された。これは主に先秦の散文、諸子百家、唐宋の散文、唐詩、北史〔中国の歴史〕や『明心宝鑑』、『孝経』、『明道家訓』、『三字経』などの入門教材であった。

学童のクラスから講師は“心伝”の教学方法を用いて儒家の宇宙論、たとえば太極-陰陽-五行（金-木-水-火-土）や、善性などの人生論、天命、天人合一、三綱五常、さらに法治や徳治といった中国古代哲学者の政治論などを教える。多くの教材は断章取義で、甚だしきに至っては、老子、孔子の深淵な詞章を抜き出したり、二程や朱熹など賢哲のかなり難解な文書を六、七歳の子どもに教えたりした。

中国人が編纂した書籍以外にも、国内の名士が著わした書籍や教材が少なからずある。そのうち、『状元詩』や『幼学五言詩』などはベトナム人の道徳、意志、品格を教育することが目的であった。『千字』、『三千字』、『五千字』、『初学問新』などの書物は、学童の文化・道徳の教育に重大な役割を果たし、学生の孝、礼、義、信、教育を指向して、すぐれた性格、道徳を育てるものであった。

教学法：学士は必ずテキストを暗誦せねばならない。そのため学生は成長するにつれて、さらにそれが自分のものとなって日増しに理解が深まる。経書が学生の知識に深く入り込んだ後は一種の格言となり、生活の中の言行をより豊かなものにする。よって儒生はしばしば「尊師重道」、「飲河思源」を反芻する。このことはすでに我が国の良き伝統となっている。

一定の水準に達すると、学童は経伝などの儒家の経典、詩賦、散文、歴史（北史と南史を含む）、地理などの学習を始める。これらの書物は学生が儒家の思想や、最も基本的な歴史常識、伝統文化を理解するとともに、および科挙試験や以後の生涯の職業を助けるものである。

総じて、ベトナムの科挙は長い歴史を有し、厳密な規範制度が形成された。チャンスを得て学習し試験に及第した者はかなり多く、各王朝において多くの知識人や官吏集団が作られるとともに、ベトナムの科挙伝統の形成と文学芸術の発展に貢献したのである。

参考資料

1. 《大越史記全書》、越文翻訳版、ハノイ、社会科学出版社、1998年。
2. 呉徳寿、《越南科榜録》、ハノイ、文学出版社、1993年。
3. 《国朝郷科録》、ホーチミン、1993年。
4. 阮世龍《越南的科学与教育》、ハノイ、教育出奔出版社、1995年。
5. 鄧金玉《黎初（1428～1527年）培養与選用官吏制度》、史学院、ハノイ、1997年。
6. 阮翠峨《越南登科録的文本学研究》、ハノイ、漢喃研究院、1997年。

7. 裴春錠《河内昇龍科榜録》，ハノイ，国家政治出版社，2004年。
8. 《阮朝科榜与科举》，順化出版社，2000年。
9. 杜文寧編輯《河内国子監碑刻》，ハノイ，2000年。
10. 劉海峰《科举制与科举学》，貴州教育出版社，2004年。
11. 阮友未《越南勸学碑刻研究》，ハノイ，漢喃研究院，2005年。
12. 丁克順《越南的黎朝儒学教育》，ハノイ，社会科学出版社，2009年。

付 録

一、写真



1. ハノイ国子監 文廟門



2. 国学門



3. 文廟の文奎閣



4. 文廟の大礼堂



5. 孔子像



6. 孔子像扁

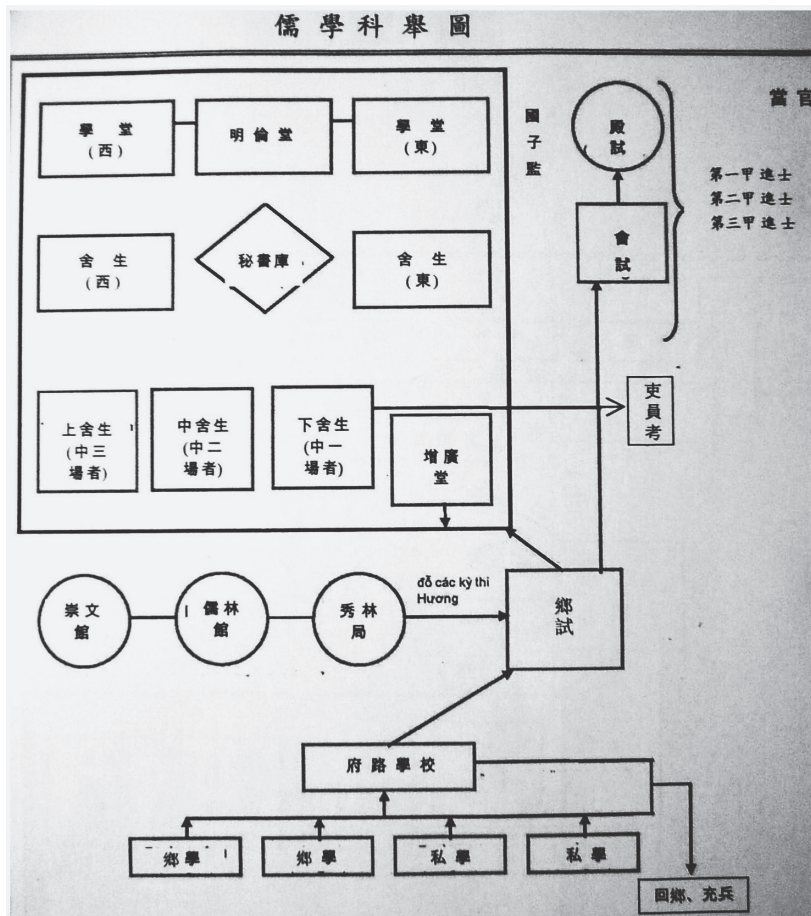


7. 文廟鐘 (辟雍大鐘)



8. 文廟建設碑

二、越南儒教科举図



〔付記〕 2009年12月1日（火）、ベトナム社会科学院漢喃研究所のDINH Khac Thuan（丁克順）准教授を招聘し本学以文館3階のプロジェクト研究室（2）において研究会を開催した。これは吾妻重二教授を研究代表者とする科学研究費・基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾を中心に」によるもので、本論文はその際の発表原稿（中国語）を翻訳したものである。

なお、DINH准教授には翌日の12月2日（水）、関西大学アジア文化交流研究センター「交流環境班」でも研究発表を行なっていただいた。その発表論文は『アジア文化交流研究』第5号（関西大学アジア文化交流研究センター、2010年2月）に「越南歴史的儒学科学制度」として掲載したので、あわせ参照していただければ幸いである。

